

以下の記載は、表題の診療ガイドラインから漢方製剤に関する記述を抽出したものです。診療において漢方製剤を使用される場合には、必ず、ガイドライン全体をお読みになり、その位置づけを正しく理解された上で行ってください。

ガイドラインのバージョンは最新のもののみを掲載しています。改定がなされていないガイドラインは、そのまま掲載しています。このガイドラインとその中の漢方の記載を、診療の参考にすべきかどうかの判断は、使用者の責任で行ってください。

小児の咳嗽診療ガイドライン 2020

日本小児呼吸器学会「小児の咳嗽診療ガイドライン」作成委員会（監修：吉原重美 獨協医科大学医学部小児科学）

診断と治療社、2020年7月15日 初版第1刷発行

Strength of Evidence

- A (強)：効果の推定値に強く確信がある
- B (中)：効果の推定値に中等度の確信がある
- C (弱)：効果の推定値に対する確信は限定的である
- D (とても弱い)：効果の推定値がほとんど確信できない

Strength of Recommendation

- 1: 行うこと (行わないこと) を推奨する (強い推奨)
- 2: 行うこと (行わないこと) を提案する (弱い推奨)

■1 漢方薬

疾患：

咳嗽

有効性に関する記載ないしその要約：

『第4章 咳嗽の治療、B.薬物による治療、12 漢方薬 薬理作用と適応』に対して、下記の記載がある。

『漢方薬は多数の生薬から構成される複合体であるため、薬理作用は複雑で不明確な点が多いが、基本的に東洋医学の薬剤のため「証」をみて使用する。』

■2 麦門冬湯、清肺湯、半夏厚朴湯、参蘇飲、柴朴湯、柴陷湯、小青竜湯、五虎湯など

疾患:

咳嗽

有効性に関する記載ないしその要約:

『第4章 咳嗽の治療、B.薬物による治療、12 漢方薬 薬理作用と適応』に対して、下記の記載がある。

『近年、積極的に薬理的な検討がなされている。含有するおもな生薬の薬理作用の観点から以下の四つに分類できる。』

- ①麦門冬・人参・大棗・甘草を主構成成分とする薬剤（麦門冬湯、清肺湯など）：鎮咳・去痰作用。
- ②半夏・蘇葉・厚朴を主構成成分とする薬剤（半夏厚朴湯・参蘇飲など）：鎮静作用と胸部不快感を改善させる作用。
- ③柴胡・黄ゴン・甘草・厚朴を主構成成分とする薬剤（柴朴湯・柴陷湯など）：抗炎症、抗アレルギー作用。
- ④気道の拡張作用を示すエフェドリンを含有する麻黄を主構成成分とする薬剤（小青竜湯、五虎湯など）：交感神経刺激効果。』

■3 麦門冬湯

疾患:

咳嗽

引用など:

渡邊直人, ほか. 咳感受性の亢進している気管支ぜんそく患者に対する麦門冬湯の効果の検討. *アレルギー* 2003; 52: 485-91.

有効性に関する記載ないしその要約:

『第4章 咳嗽の治療、B.薬物による治療、12 漢方薬 薬理作用と適応』に対して、下記の記載がある。

『麦門冬湯は、咳嗽の誘因となる一酸化窒素 (nitric oxide: NO) の増加を抑制し気道炎症を改善する末梢性の鎮咳作用をもつとの報告があり、強い乾性咳嗽や切れにくい喀痰がある際に適応となる。』

■4 麦門冬湯

疾患:

気管支炎の咳嗽

引用など:

野中善治, ほか. 小児の持続性咳嗽における麦門冬湯の使用経験. *日本小児東洋医学会誌* 2004; 20: 15-21.

有効性に関する記載ないしその要約:

第4章 咳嗽の治療 B.薬物による治療 12 漢方薬 薬理作用と適応に対して、下記の記載がある。

『乳児～学童期の気管支炎の咳嗽に対して、麦門冬湯とデキストロメトルファン臭化水素酸塩水和物（メジコン®）の効果を比較したところ、両者ともに効果は3日以内にみられ、その差はほとんどみられず、一部、デキストロメトルファンに不応であった例にも麦門冬湯が効果を示したとの報告がある。』

■5 柴朴湯

疾患:

咳嗽

引用など:

Egashira Y, et al. A multicenter clinical trial of TJ-96 in patients with steroid-dependent bronchial asthma. A comparison of groups allocated by the envelope method. *Annals of the New York Academy of Sciences* 1993; 685: 580-3.

[EKAT 構造化抄録 \[PDF\]](#)

有効性に関する記載ないしその要約:

『第4章 咳嗽の治療、B.薬物による治療、12 漢方薬 薬理作用と適応』に対して、下記の記載がある。

『柴朴湯はアレルギー性炎症、好酸球活性の抑制、抗ヒスタミン作用、血小板活性化因子 (platelet-activating factor: PAF) 産生抑制作用などがあり、気道炎症の抑制により鎮咳作用を示すとされている。成人では喘息患者におけるステロイド薬の使用量を減量できるとの報告もある。』

■6 小青竜湯、五虎湯、麻杏甘石湯

疾患:

喘息発作に伴う咳嗽

有効性に関する記載ないしその要約:

『第4章 咳嗽の治療、B.薬物による治療、12 漢方薬 薬理作用と適応』に対して、下記の記載がある。

『麻黄にはエフェドリンが含まれており、気管支拡張作用を有する。麻黄を含む小青竜湯、五虎湯、麻杏甘石湯は喘息発作に伴う咳嗽に有効とされる。』

■7 漢方薬

疾患:

咳嗽

有効性に関する記載ないしその要約:

『第4章 咳嗽の治療、B.薬物による治療、12 漢方薬 投与方法』に対して、下記の記載がある。

『咳嗽に用いる漢方薬の一覧を表 4-19 に、小児への投与量の目安を表 4-20 に示す。投与方法は一律 1 日 3 回食前・食間内服である。』

備考:

咳嗽に用いるおもな漢方エキス製剤の一覧表と投与量の目安の表の記載がある。

■8 漢方薬 (麦門冬湯、柴朴湯、麻杏甘石湯、小青竜湯、柴陷湯)

疾患:

咳嗽

引用など:

広瀬滋之. 日常よく見る疾患と診断のポイント. 小児科疾患漢方治療マニュアル. 現代出版プランニング 2006; 98-106.

有効性に関する記載ないしその要約:

第4章 咳嗽の治療 B.薬物による治療 12 漢方薬 投与方法に対して、下記の記載がある。

『咳嗽を伴う急性上気道炎 (一般的ななかぜ症候群) に対する漢方治療の例のフローチャートを示す。咳嗽の性状から分類しているが、実際は症状が重複することも多く、合方にして使用することも多い。』

備考:

咳嗽の種類による使い分けのフローチャートの記載がある。

■9 漢方薬

疾患:

服用方法

有効性に関する記載ないしその要約:

『第4章 咳嗽の治療、B.薬物による治療、12 漢方薬 投与方法』に対して、下記の記載がある。

『漢方薬は味覚的に小児には飲みづらいものも多いため、オブラートや服薬用ゼリーを用いたりハチミツなどの他の食品と混ぜて飲ませるなどの工夫も必要である。二次感染の可能性を考える場合は、漢方薬と抗菌薬の併用が望ましい。』

■10 漢方薬

疾患:

副作用

引用など:

伊藤隆. 厚生労働省副作用情報に基づく一般用漢方製剤の副作用の件数とその内容の調査. *日本東洋医学雑誌* 2016; 67: 184-190.

副作用に関する記載ないしその要約:

『第4章 咳嗽の治療、B.薬物による治療、12 漢方薬 副作用・禁忌』に対して、下記の記載がある。

『いずれの薬剤も小児では使用経験が少ないため、安全性は確認されていない。ただし、漢方薬は全般的に、比較的副作用が少なく、小児でも使用しやすいのが特徴である。共通する副作用として、皮膚症状（発疹・発赤・痒み）や消化器症状（食欲不振・胃部不快感・悪心・下痢など）、また、まれではあるが間質性肺炎（咳嗽、発熱、息切れ、肺炎など）、偽アルドステロン症（尿量低下、手足のむくみ、まぶたの重み）、ミオパチー（手足のしびれ、力が入らない）、肝障害（全身倦怠感など）があげられる。』

■11 麻黄

疾患:

心疾患、腎疾患 など（副作用）

副作用に関する記載ないしその要約:

『麻黄は心疾患、腎疾患など、多くの疾患を悪化させる可能性が指摘されており、健常者にめけいれん発作や頭痛、振戦、高血圧などを起こす可能性があるため、小児の使用は避けるべきとの指摘がある。特に交感神経を刺激することから動悸を助長する可能性があるため、 β_2 刺激薬との併用には注意が必要である。』

■12 柴朴湯、柴陷湯

疾患:

膀胱炎様症状（副作用）

副作用に関する記載ないしその要約:

『柴朴湯や柴陷湯においては、膀胱炎様症状（頻尿、排尿痛）なども特記すべき副作用として注意が必要である。』

■13 清肺湯（山梔子）

疾患:

腸間膜静脈硬化症（副作用）

副作用に関する記載ないしその要約:

『厚労省医薬・生活衛生局は清肺湯に含まれる漢方生薬の山梔子により腸間膜静脈硬化症が現れるおそれがあるとして、長期投与する場合にあっては定期的に CT、大腸内視鏡などの検討を行うことが望ましいと報告している。』

■14 麻黄

疾患:

心疾患、腎疾患 など（副作用）

副作用に関する記載ないしその要約:

『参考 一般用医薬品（OTC 医薬品）・民間療法の OTC の服用と禁忌』に、下記の記載がある。

『麻黄は心疾患、腎疾患など、多くの疾患を悪化させる可能性が指摘されており、健常者にもけいれん発作や頭痛、高血圧などをおこす可能性があるため、小児の使用は避けるべきとの指摘がある。麻黄の主成分にエフェドリンがあり、特に交感神経を刺激することから動悸を助長する可能性があるため、 β_2 刺激薬との併用には注意が必要である。』（12 漢方薬 副作用・禁忌の記載と同様のことが記載されている。）